
キアラン

玉木 もとか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キアラン

【Zコード】

Z9610Y

【作者名】

玉木 もとか

【あらすじ】

悪魔であるキアランと天使のフィオナの恋の物語。

だが、それは禁断の恋で、中々あうことすらもままなら無い一人の出会い。

二人が唯一会える場所である「扉間」が物語の鍵となる。

キャラクター 1（前書き）

初投稿の作品になります。

文脈もおかしな所がありますし、アドバイス等がもらえたるにあれば
たいです。

気ままに楽しんでいただけると嬉しいです。
これから、よろしくお願いします。

「お待ちくださいー！キアラン坊ちゃんー！」

屋敷の中をひたすら走った。

黒髪のやや長い髪が、顔に当たる。

俺はそんなことは気にせずにただひたすら走った。

「お待ちくださいー！」

俺を追いかけてるのは、俺の屋敷の家政婦だ。大金持ちと云ひことではないのだが、一応貴族である。

そんなことはどうでもいいのだが、なぜ家政婦から逃げているのかと言ひとこれから俺の叔父さんが来るからだ。

どうして逃げるかって？

叔父さんは、嫌味臭いし五月蠅いしで、俺はあの叔父さんが嫌いだ。単純に会いたくないのだ。だから、云ひして逃げている。

それに、今日はあいつとの約束もあるし

「じゃあなー叔父さんに、今日は急用ができるから会えなくて残念だ、つてな！」

俺は、窓から飛び降りた。

ここは三階だ。

だが、そんなものは関係ない。

「ま、お待ちくださいー！」

家政婦は、叫ぶがもう遅い。

俺は窓から飛び降りる。だが、地面に落ちてはいない。なぜなら、俺の背中からは大きな黒い翼が生える。

「じゃあなー！」

家政婦に軽く手を振つて、翼で空を飛ぶ。

「ちょっと……ダメですー早く戻つてくださいー！」

家政婦は青ざめた顔で俺を止めようとするが、家政婦の云ひとなど聞かずに悠々と空を飛んだ。

キャラクター 1（後書き）

前書きにも書きましたが、気ままにお楽しみください。
よろしくお願ひします。

「ふうう……。これで大丈夫だろ」とてつもなく速いスピードで、館から一キロほど離れた小さな森辺りに移動した。そして、宙にいるままで止まる。後ろを振り返ると館は小さく見えていた。

きょろきょろと辺りを見渡すが、俺を捕まえるために追つてくる者はいないようだ。人影すらない。

「さてと、そんじゃあまあ行くとするか！結構時間くつたけど、余裕が無いわけじゃないし……」

俺は、左腕に巻きついている腕時計を見る。待ち合わせの時間は、十時半。そして、今は十時一十五分だ。

「げつ……！」

扉間という場所が待ち合わせ場所になつていて、その扉間に行くには、速くて十分は掛かるのだ。

「速くいかねえと、怒られる！」

大きくて黒い翼をすばやく羽ばたかせながら、扉間という場所に移動して行つた。

俺達は、「悪魔」と言つ存在である。悪魔は、ほとんどの者は黒い大きな翼を手にしている。

悪魔と言えど、腹黒い奴やお人好しな奴もいる。まあ、性格も色々あるし、個性豊かだ。

悪魔と敵対する者。それは「天使」だ。

敵対といえるほどのことではないが、悪魔と天使が話し合う場が月に一度ある。そのときには、ほとんどの時に批判の口論が飛び交う物だと聞いている。

ま、俺は天使のことについてはあまり知らないが、いじめ外がるのだけは分かる。

悪魔がいるのは「地界」。そして、天使がいるのは「天界」だ。悪魔は天使のいる「天界」には入れない。それと同様に、天使は「地界」には入れないのだ。

そして、悪魔と天使がいられるのは「扉間」と言つ空間。

扉間は、空間が埋め尽くされるほどの扉が置かれている空間だ。扉以外は空間が歪み、背景は虹色に輝き長時間居ると頭が痛くなりそうな場所だ。

扉は、さまざま世界へと繋がる。時代も扉によつて違い、場所も違う。「人間界」という世界があるらしいのだが、俺はまだ行つたことが無い。

そこは唯一といつていいほどの、天使と接触できる空間なのだ。あいつに会うためというのもあるが、俺は、天使をいじめるのも楽しみにしている。

はつ……！

何を考えてんだ俺は……！

そんなこと考えてたら、時間に間に合わねえだろ！

俺はあわてて腕時計のほうを見た。すると、待ち合わせ時刻の一分前を指していた。

扉間は、館から遠く離れた街の公園の片隅に存在する。街のほかの場所にもあるのだが、大きい会社の中や公共の施設などにしか扉間へと続く扉は無い。

「これはかなりやべえ！ もう、あの方法を使うしかねえな……」

ポケットの中に入っていた、金色の鍵を取り出す。

「開け！ 扉間の扉。我が主に従え！」

その言葉を発したと同時に、キアランの周りを光が包む。そして、金色のきらびやかに光り輝く扉がキアランの前に現れた。

「よしつ…うまくいった」

ドアノブに手をかけ、まわして扉の中を通った。

「ふうううう」

この力を使うと、無駄に魔力をつかうんだよなあ～。もつと楽にできればいいのに。

疲れたせいもあり、扉にもたれ掛かった。扉にもたれ掛かつたまま、数十秒が過ぎる。

「さてと。そろそろいかねえと、本格的に怒られるわ」

もう少し休みたい所ではあったが、重い腰をゆっくりと上げた。え～。どこだろ。たしか、少し古びた感じの木の扉だったよな。さまざまな扉がある中から、待ち合わせの田印にしている木の扉を探す。

「おっ。これっぽいな」

俺が出てきた扉から百メートルほど先のところに、少し古びた木の扉はあった。

木の扉にはガラスの部分があり、そこをのぞいてみると反射をして、自分の顔だけが映る。その顔を見ると、一番目に入るのは目だつた。右目は赤で、左目は金色という不思議な目の色をしていた。俺の知っている家族は皆、両目は金色である。俺にはそれでも別にいいと思っている。

そんな事を考えながらも、扉に少しもたれるような姿勢でやつを待つた。

俺が待ち始めてから、数分が経つた。

「……あいつ。珍しく時間護れてねえじゃねえか……。自分が五月蠅いくせによつ……」

あいつがいないかと思つて、辺りを見渡すが、周りには人影は無い。ただ、扉が並んでいるだけである。そのため、静寂が辺りを包んでいた。

……おいおい。遅すぎるんじゃないやねえか！

眉をひそめて再び腕時計を見ると、待ち合わせ時刻から数十分も経っていた。

「つたく。早くしろよな……」

ん？

俺がそう呟いたときに、さわやかな風に乗つて、誰かの声が聞こえた気がした。風が吹いたのは気のせいかもしない。なぜなら、扉までは自然現象が起こるはずも無いのだ。

その声は、はつきりした物ではなく、小さいか細い声だ。空耳かとも思つたが、もう一度耳を澄ませた。すると、また同じ声が聞こえた。

俺はその声が聞こえるほうに向かつて、足を忍ばせて歩いた。なぜ音を立てない必要があるのか、俺も疑問に思つたが、何故かそのまま続ける。

どんどん近づいてこづちに、それが泣き声だといふことに気がつく。

そして、もつと近づいていくと、少女が見えた。白いローブで顔は見えないが、俺と同じぐらいの歳でまだ若い。髪はきれいな金髪で、長い髪だ。

少女が泣いているのを近くで見るために、彼女の真後ろの扉に隠れる。

移動して行つたところは、扉が多い所から離れた、扉の少ない所だつた。彼女なりに、無い手も見つかりにくい場所に来たのだろうかと考えた。

……。元気づけられることはないかなあ……。でも、急に話しかけるのはダメだし……。そつだ……！

泣いている彼女にも気づくよつな大声で、呪文を唱える。

「空から来る迅雷よ。我に力を貸せ。雷！」

「！」

泣いていた彼女は、顔を上げて俺のほうを見る。

俺の唱えた呪文は、悪魔が使える呪文の一つだ。この呪文は、力

のある天使なら使える。そして、一番の威力が少ない攻撃呪文である。そのため、速さもさほど無い。

そんな呪文だから、避けたり、天使が得意とする防御呪文か何かで防ぐだろうと思っていた。

ドンッ。

爆発音が聞こえる。

彼女の方は、土埃で見えない。

土埃が晴れてくれるが、彼女の様子がおかしいことに気づいた。声も、動いている気配も無いのだ。

そして、完全に土埃が晴れたとき、攻撃してしまった彼女が倒れているのに気づいた。

「えつ……！」

俺は驚いて、彼女の方によった。

「おいつ！しつかりしろ！」

彼女の肩を持つて、揺するが動かない。息はしている。だが、背中に大きな傷ができてしまっている。その傷から出る血は、純白の服を赤く湿らせる。

……えらいことしちまつたな……。どうしよう……。あいつが来れば何とかなるかもしねないが……、待ち合わせ場所に来ねえし……。俺、回復呪文は下手だからな……。やれたとしても、傷とかが残つちまうだろうし……。女の子だしな……。しょうげねえ！やれるだけやってみるか！

「穢れない心よ。その力を今、解放せよ！回復！」
リカバ

少女の周りに結界が包み込んだ。

少女の傷は、倒れたときにできた擦り傷ぐらいは治っていた。だが、肝心の大きな傷の方は治る気配はない。

……やつぱだめだな……。あいつにきてもらわねえと。さっきの爆発音で、扉間にいたら何かあつたって気づいてるだろ。早く来いよな……。

俺は、少女をまじまじと見つめた。

彼女は、白いベールを着ている。下にはワンピースを着てあり。やはり、それも白だ。ここまで白だと、天使の可能性は高い。

今まで、たくさん天使に攻撃をしたりしてきたが、ここまで傷になつたのは初めてだ。いじめてきた中では、怪我をしても擦り傷が少しあるだけだが、ここまで大きな傷を負わせたのは初めてだつた。

でもなあ……。つていうか、泣いてるから手加減までしたのに……。どんだけドンくさいんだ、この子。

ん？涙……。この子……、ホントどうしたんだろう……？

「はああ～」

重いため息を吐く。

それにしてもこのこの服……、結構いい服だよな。それに、この髪留め……、瑪瑙でできるし……。ネックレスも、金でできるし……。も、もしかして貴族！……それなら……、偉い相手に手を出しちまつたことだよな！

「はああ～」

そう思つと、先ほどよりも重いため息が出た。

背中の傷は、治つてはいなが悪化はしていないようで、血も止まつてゐる。

彼女を助けたいが、何もできずに困り果ててゐる所に、背後から声がした。

「キアラン！」

「ハンナ！やつと来ててくれたばあふあ

」

声をした方を振り返つて言うと、いきなり殴られた。

赤い髪のショートカットで、眼も赤い。ハンナは、黒いドレスを着ている。だが、重いものではなく軽い物なので、普通に行動はしている。

ハンナは小さい頃から一緒に家も近かつたので、小さい頃はよく遊んでいた。だが、人間で言う十歳ぐらいのときに急にハンナの家族は違う街に引っ越してしまったのだ。それから、何回か会つ」ともあつたのだが、会うのは久しぶりである。

「何やつてんのよあんたは！私の時間に間に合つて無いし、へんな爆発音がするし、何があつたのよ！…………なに？この子……」

なにがあつたって……。それに、俺は時間通りに行つたぞ！

「何いつてんのよー来てなかつたじやない！で、この子はどうしたのー！」

…………じゃあ、あれだ。同じような古びた木の扉があつたんだよ。

「今はそっちの話じゃない！」

また殴られた。

ああ、ええつと……なんか、いつもみたいにいじめてやるひつと思つたけど、泣いてたから、軽い攻撃にしたんだけど、もろに当たつちゃつたみたい。

「はあ？なんで泣いてる女の子に攻撃するのよー！」

ええつと……まさにその通りです……。つていうか、本当はきっかけを作ろうと思つて攻撃したんですけど、まさかこんなことになるとは思わなくて……。

「言い訳はいいの！それで、私に言つことはー！」

ハンナは俺が何をして欲しいのか悟つたらしく。

「えつと、お願ひします！この子を治してください。」

「分かればそれでいいのよ。」

ふんっ。と、鼻で笑つてハンナは女子の方へ行つた。

俺は、ハンナがとりあえずは治してくれるということに安心し、

ほっと胸をなでおろす。

俺の作つた結界では邪魔になるだろ?と思いつつ、結界をとく。ハンナは俺の回復呪文よりもいい呪文を言い、てきぱきと作業を続いている。

そんなハンナ彼女の様子を、少し離れた所からぼんやりと眺めていて思った。

……ハンナは、攻撃呪文も守備呪文もバランスよく取れてるからなあ。勉強もできるし、かわいいし、性格もいい。ま、他の男子から言わせれば文句なしなんだろうけど。結構きついんだよなあ。ははっ。まあ、自分では仲良くなつてたつもりだけ。

たまに誤解する奴もいるけど、俺とハンナは恋人ではない。ただの腐れ縁だ。まあ、そう言ったとしても疑わしい目で見られるけどな。そんなことをぼんやりと、思つていると急にハンナが声を上げた。

「よしつ！ できた。時間が掛かつたけど、これで大丈夫でしょ。」

ハンナが、彼女の治療をし始めてからまだ五分しか経つていない。あれだけの傷だつたのに。

……これで時間掛かつたとかどうなんだよ……。これで時間掛かるんだつたら、俺はどうなるんだよ！ それに、傷を治す前より肌とか綺麗になつてないか？

「さつすが、回復能力Sだけあるなあ……」

ハンナは、少し顔を赤らませてそつぽを向いた。

「ふんつ。これぐらい当たり前よ！」

そのまま、すたすたと歩いて、俺達が見えるぐらいの離れた所で俺達を見ていた。

「……

まあ、いいや。

彼女はどういう状況で泣いていたのかも分からず、すりきつしてい
ない。

「まま、帰るわけにも行かず、彼女が起きるまで待つことにし
た。

「おひつ。おひつち来いよ。」

ハンナは、反抗することもなくよつてきた。

「なによ?」

「どうなんだよ?」の子の様子。なんか問題ありますか?」

「うん。今のところ特に問題ないわ。」

「ふん。そつか

その一言を聞いて、少し安心する。俺のせいで死なれても困るか
らな。

俺らは、彼女が起きたときにびっくりさせのも悪いことと思つて、
少し離れた場所に行って様子を見ることにした。

「そういえばさあ。おまえ、何のようだつたんだよ?」

「えつ?」

ハンナは、少し驚いたよつてして言つたが、すぐ応えた。

「な、なんでもないわよ!た、ただ……」

ちょっと、顔を赤めらせてそっぽを向いてしまつたハンナ。

「?」

そんなハンナの事を不思議に思いながら、彼女の方を向いた。
すると、ゆっくり起き上がりとつとつしている彼女がいた。

「…………」「はは、どう?」

彼女は、きょろきょろと辺りを見渡している。

そんな彼女の様子を見ながら、俺は近づいていった。

「よおつー。」

「ー。」

びくんっと大きく体を震わせた彼女は、恐る恐る俺のほうを振り返った。

彼女は、青ざめた顔で俺のほうを見ている。攻撃されたのが自分だと分かっているのだろう。ひどく怯えていた。

「……だいじょうぶだって。なにもしねえよ。俺は、キアランって言つんだ。」

「……」

まだ、俺の事を警戒している。

「名前は？」

「……フィオナ……」

以外にも凜として、でもかわいらしく、透き通るような声でそう呟いた。

俺は、フィオナのロープをどける。そこからのぞいたのは、黄緑色の綺麗な瞳だった。整った顔立ちに、少し幼さが入っている。

「…………」

綺麗だなあ…………。

「あの…………」

ぱうりとして見ていたのにぱうり対処したらよいのか分からぬようすで、おどおどしている。それに、たぶん氣づいていいるのだらう。俺が天使と対立する悪魔だということに。

単刀直入といつても良いほどだが、

「なあ、フィオナちゃん。ぱうりして泣いてたの？」

などと聞く。

彼女を傷つけないようになり、なるべく明るく言ひたつもりなのだが、彼女の瞳からは、一筋の涙が流れ落ちた。

「！」

ぎょっとして、俺はフィオナを見つめる。それで、おどおどするのはこちらの番だった。

「私…………お父様が、仕事の人と、けんかするのを見ちゃって…………。怒つてるときのお父様は、眉を吊り上げていてとっても怖い…………。そんなんだから、お父様は嫌われちゃって。誰も争つたり、ケンカしてる所なんか見たくない」

フィオナは、泣きながらそう語つた。

「俺じゃ考えられないことだな…………。それにしても、そんなことでそこまで泣かなくても…………。」

今もなお、彼女は泣きじやくしている。

「…………」

どう対応していいのかも分からず、彼女が泣き止むのを静かに待つて いる事にした。だが、遠くから見ていたハンナが、突然俺の真横に現れたのだ。

「あんつたねえ！ そんなことでぐじぐじしないの！ 折角のかわいい顔が台無しじゃない！」

フィオナは突然現れたハンナを見て目を見開いていた。それでいて、泣くのは一旦やめた。それは、驚いているせいでもあるのだが。ああ……。面倒くさいな。そういうえばハンナってこういうの嫌いだつけ。

フィオナは、俺が出てきたときと同じように怯える。それを見て、あわてて説明をする。

「えっと、こいつはハンナって言うんだ。家も近くで、小さい頃からいたから幼馴染つていうやつだな。まあ、俺から言わせたら腐れ縁だけだ。」

「何ですって！ 聞き捨てなら無いわねっ！」

それから、ハンナと言つて合つているうちにフィオナも見ついて、自分に危害を与えるつもりは無いのだとこうことを悟つたようだ。

「くすっ」

フィオナは、ハンナと俺が言い合っているのを見て小さく笑った。笑ってしまったのに気づいて、口を押さえて顔を赤めらせた。

ハンナと俺はお互いを見合い、小さく笑った。

「もう、泣かないのよ。折角綺麗な顔なのにもつたいたいわ。」

「……はい」

あとな、敬語じゃなくて良いんだぜー。ビビセ知り合つたんだから。

「でも……」

「良いの良いの。私のことは、ハンナって読んでもうだい！」「俺のことはキアランって呼べよな。

「あの……どうせなら、私のこともフィオナって呼んでもらつても良いですか……？」

もちろん！

「私も良いわよ。どうせ知り合つたんだもの。折角だから。」

ハンナは、珍しく優しい。もつちょっといつもならきつく言うのだが、まあ、気が合つならいいか。

「あの……これもついてもらえませんか？」

彼女は腰に掛けていた小さい鞄から取り出して、おずおずと差し出した。

「「石？」

見事にハンナと声がかぶつた。

「簡単に言えば石です。天界で使われている物です。石によつて能力も違います。」

どこからどう見ても、ただの丸い白い石であるからであるからである。

「この石は何の能力があるの？」

「えっと……それは言えません。でも、貴方方には害は無いです」

ハンナはフィオナの手から、ひょいと石を取る。そして、それ

をじつと眺めている。

俺も、フィオナの手から石を持ち上げる。

「ふうん？」

ハンナは石に対して警戒しているようだ。なんせ相手は天使だし、もしかしたらオレ達の力が弱まる物かもしれない。だが、俺は石を観察して見たが、天使の魔力を感じるだけで何も無かつた。

「そんなに警戒しなくても良いですよ。貴方方は敵じゃないし、ましてや悪魔でも無いでしょう？」

俺とハンナは、顔を見合わせる。

違つぞ？

「へつ？」

フィオナは目を見開いてきょとんとした声を漏らす。

「そうよ。私達は、天使とは違つ。私達は、悪魔なんだから。」

「へつ……え……？」

フィオナはその言葉を聞いて、意味が分からぬといつたようでは頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいる。

「だつて……泣いている私に優しく声をかけてくれたじゃないですか。」

「……その前に、俺がおまえを攻撃しちまつたのを忘れたのか？」

「あつ……」

フィオナはその事を思い出したじつへ、頭を抱えてしゃがみこむ。そのまま何かを小さく呟いている。

「そんな……悪魔なんかに……石を渡しちゃつたなんて……」

そんなに言わなくとも……。それに、悪い悪魔ばっかつてワケじやないんだぜ。少なくとも、俺達はいいほうの悪魔だと想つね。

「そうよ。まあ、キアランはたまに天使をいじめたりしちつしてるケド。」

「つむせえ！」

フィオナは俺の言葉に信用したらしく、微笑んだ。

「今もこいつして、私に攻撃してこないということで、良い方の悪魔だといつことは信じます。でも、天使をいじめるのはよくないことがあります。」

「はい……すみません。

俺が方を上げると、ハンナも続ける。

「そうね。その癖は直しなさい」

「はい……ほんと、すみませんでした。」

「ふんつ。わかれればいいのよ。」

「くすつ」

フィオナは、そんな二人のやり取りを見ていて、再び微笑した。それを見た、俺とハンナはまた笑い出す。

三人が笑つて、和やかな空気が流れていった。だが、そんな空気を打ち壊した物があつた。

フィオナの腰に掛かっている小さい鞄から、「ピーッ ピーッ」とアラームのような音が流れたのだ。

「あつ…」

フィオナは、その音を聞いて顔を曇らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9610y/>

キアラン

2011年11月29日17時52分発行